

平成19年度国連持続可能な開発のための教育の10年

促進事業に係わる成果報告会

企画運営業務報告書

平成20年3月21日

特定非営利活動法人ボランティアネイバーズ

■事業名：平成19年度国連持続可能な開発のための教育の10年促進事業に係わる成果報告会

■タイトル：ESD フォーラム「持続可能な未来をつくるために私にできること」

～かすがい KIZUNA プロジェクトお披露目フォーラム～

■事業目的

今年度環境省 ESD 促進事業として採択された愛知県春日井市の絆再生プロジェクト「かすがい KIZUNA」の実践報告を受けて、プロジェクトの課題整理と解決糸口の模索をし、さらにこの地域の ESD を推進していくネットワークや力を育むことを目的として実施します。

■事業概要

日時：平成 20 年 2 月 9 日(土) 13:00～17:00

場所：善光寺別院 願王寺(名古屋市西区中小田井一丁目377番地)

参加者数：55 名

主催：環境省中部地方環境事務所

企画・運営：特定非営利活動法人 ボランティアネイバース

■企画概要

13:00～	■オリエンテーション *フォーラム企画趣旨説明 *2005 年キックオフミーティングでの課題・目標の共有 *ESD のこれまでの活動と現状・環境教育推進法改正などの情報
13:30～	■環境省 ESD 促進事業モデル地域 「かすがい KIZUNA プロジェクト」の実践報告
14:30～	■6つの分科会「ESD 的地域の学びをつくる」 「つなぐ」「人と人の関係」「ESD と企業」「ESD 行政」「つなぐ役割とつなぐ人」「未来をつくる」をテーマとする分科会で、かすがい KIZUNA プロジェクトを素材にこの地域でどのような取り組みができるかを話し合う。この地域の ESD 普及に向けた 2008～2010 年のアクションプランのタネを模索する。
16:00～	■全体会
17:00	■閉会の挨拶

■分科会概要

テーマ	タイトルおよび概要	ゲスト
① つなぐ	ESD 事業のビジョンを達成するネットワーク倍増計画	宮崎稔さん
	ESD のキーワードは「つなぐ」。つながると何がどのように変化し、ESD の学びとなっていくのか、ESD のコンセプトに迫る。	(学校と地域の融合教育研究会・秋津コミュニティ)

② 人と人の 関係	ESD でつながる人＋人＋人＋人の関係づくり	杉山郁子さん (日本体験学習研究会・グループファシリテーターの会 Seeds)
	ESDの学びの場は多様な人が関わってつくりあげられる。はじめて出会った人がお互いに安心して関わりが持ち、自己実現、ビジョン実現を目指す関係づくりについて考える。	
③ ESDと 企業	ESD＝企業＋市民＋NPO＋地域… 企業がESDに関わると。	門井徳孝さん (株式会社デンソー 総務部企画2室 DECOポン事務局)
	ESDを地域で推進するために企業の存在は欠かせない。しかし、企業はESDにどのように関わることができるのだろうか。企業と連携した地域でのESD活動の可能性について意見交換する。	
④ ESDと 行政	ESD＝行政＋市民＋NPO＋地域… あなたは行政とどう協働しますか？	市嶋彰さん (環境共育ネットワーク「ワンダー・スクエア」・NPO法人「まちづくり学校」)
	ESDを地域で実践するためには、地域に必要な仕組みや枠組みが必要である。既存の法制度、政策、予算の枠組みを理解したうえで、どう作るのか。今後必要と思われる政策などについて検討する。	
⑤ つなぐ役割 とつなぐ人	ESDをつむぐ地域のコーディネーターになる	浜本裕子さん (ESD 関西)
	ESDを実践している人や団体がつながると、より豊かな学びが展開される。だからこそつなぐ役割と人が大切。コーディネーター・コーディネーターに必要な要素・スキルについて意見交換する。	
⑥ 未来を つくる学び	学びの内容、学びの手法、学びの場、学びのしくみ…。	伊藤伸介さん (農山漁村文化協会 文化部)
	地域で豊かに子どもを育むESD的な学び、さまざまな可能性を膨らます学びのあり方について意見交換する。	

事業報告

【オリエンテーション 13:00－13:30】

〈内容〉

- * フォーラム企画趣旨説明
- * 2005 年キックオフミーティングでの課題・目標の共有
- * ESD のこれまでの活動と現状・環境教育推進法改正などの情報

〈報告者〉 天野 学さん(ESD-T(東海)メンバー)

古澤礼太さん(中部ESD拠点 協議会事務局)

上野 薫さん(かすがい KIZUNA プロジェクトコーディネーター)

〈進行〉 新海 洋子(環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー)

フォーラム最初のプログラムであるオリエンテーションでは、この企画の趣旨や ESD のこれまでの活動と現状・環境教育推進法改正などを共有することをねらいに行った。60 名近い参加者が一同に集まった会場はすでに熱気があり、ESD に連なる人々の志を目の当たりにした。

が、まずは最初に「ESD という言葉を聞いたことがある人は挙手してください」と会場に投げかけたところほぼ全員。次に「地域で ESD 活動を実践している人は？」と質問をするとまばらな挙手。今回の参加者の多くは、これから具体的に活動しようとしている人であったため、オリエンテーションの内容は、いかに東海地域での具体的な活動の紹介やどのような拡がり、影響力を生み出しているのか、今後取り組もうとしている活動の提案などにポイントを絞って説明をした。

まずは手づくり年表(下記参照)を提示し、2002 年のヨハネスブルグサミットで ESD が提唱され 5 年経ったいま、東海地域でどのような ESD の動きがあるのかを「見える化」した。

〈東海地域の ESD の取り組み年表〉

年度	2002	2003	2004	2005	2006
かすがい KIZUNA	ヨハネスブルグサミットで日本から提案				・環境省 ESD 促進事業計画フェーズ採択・事業スタート
ESD-T		・ESD 地域ミーティング中部 ・ESD 地域ミーティング岐阜	・ESD 地域ミーティング三重	・ESD-T キックオフミーティング	・ESD-T 担い手会議 ・ESD 事例調査
中部 ESD 拠点協議会 (RCE-ESD)				・ESD の 10 年 アジア太平洋地域開始記念式典ーグローバルゼーションと持続可能な開発のための教育ー	・第 1 回中部 ESD 拠点準備フォーラム
EPO 中部				・ESD-T キックオフミーティング	・ESD-T 担い手会議 ・ESD 事例調査 ・ESD 講座「私たちがつくる、これからの教育」 ・ESD フォーラム「未来をつくる教育と経済ー持続可能な社会とは？ESD の可能性ー」(名古屋国際センターとの協働)

年度	2007	2008	2010	2014
かすがい KIZUNA	・環境省 ESD 促進事業実践フェーズ採択 ・かすがい KIZUNA プロジェクトお披露目フォーラム			
ESD-T	・ESD-T 担い手会議 ・エコライフフェア等のイベントでの啓発 ・ワールドコロポフェスタ(ESD 広場) ・がつつり ESD 講座 ・かすがい KIZUNA プロジェクトお披露目フォーラム	・「つぶやきをカタチ にしよう～ESD 的学び をつくらう～」講座	生物多様性 COP10 名古屋開催予定	「ESD の 10 年」キャンペーン最終年
中部 ESD 拠点協議会 (RCE-ESD)	・第 2、3 回中部 ESD 拠点準備フォーラム ・大学フォーラム ・ESD ユースフォーラム in “WE LOVE NAGOYA” ・認定・発足 ・なごや環境大学「はじめよう！ ESD 講座」 ・中部 ESD 拠点発足会開催 ・第 1 回伊勢・三河湾流域圏 ESD フォーラム ・「ESD (持続可能な発展のための教育) 促進ワークショップ・国際シンポジウム ー地球市民の視点から地球の未来を考えるー」			
EPO 中部	・かすがい KIZUNA プロジェクトお披露目フォーラム ・ESD-T 担い手会議 ・エコライフフェア等のイベントでの啓発 ・ワールドコロポフェスタ(ESD 広場) ・がつつり ESD 講座	・「つぶやきをカタチ にしよう～ESD 的学び をつくらう～」講座		



ESD-T(東海)の活動についてはメンバーの天野さんから、2005年に実施したESD-Tキックオフミーティング後の活動として事例調査や学習会、イベントへの参加との報告があった。ESD-T が 2005 年のキックオフミーティングの際に作成した 2014 年までの目標の共有をし、今後の活動と一緒に作り出しましょう、というメッセージを発信された。

次に中部 ESD 拠点協議会事務局を担っている古澤さんから、国連が認証している RCE を中部地域では昨年取得し、活動範囲を伊勢・三河湾に流れ込む河川の流域圏とし、上下流間や流域間における多様なテーマで活動している団体をつなぎ、相乗効果を得ながらさらに活動の輪を広げていく、との報告を得た。

また、中部大学、東海・中部 ESD 市民推進会議、なごや環境大学、名古屋大学、EPO 中部、岐阜大学、三重大学の 7 者により構成される運営委員会が中心となって事業立案などを実施し、参加している 44 団体と連携しながら事業を遂行することとし、具体的には、地域の ESD 活動の促進支援や国内外の ESD 地域拠点との交流を行うことなどが話された。

さらに今回のフォーラムの目玉である環境省 ESD 促進事業モデル地域であるかすがい KIZUNA プロジェクトの簡単な報告や EPO 中部の今後の動きについて紹介がされた。

また、今後の環境教育推進法改正の動きや 2008 年度の ESD 関連の施策を紹介し、環境省の動きに対してアンテナをたて、地域現場のニーズに基づいた提案づくりをすることの必要性や、行政や事業者といかに関係性を育み ESD のしくみをつくっていくか、などの課題に触れながら、ESD を必要としている私たちが学びの場やしきみづくりを担うこと、そして今日の場が次の展開を生み出すためのきっかけの場であることを共有した。

【環境省 ESD 促進事業モデル地域「かすがい KIZUNA プロジェクト」の実践報告

13:30—14:30】

環境省では昨年度から ESD 促進事業を実施し、全国 14 ケ所にモデル地域を設け、多様な ESD 活動を展開している。この地域では、愛知県春日井市の絆再生プロジェクト「かすがい KIZUNA」が 2006—2007 年度と採択され、学校・地域・企業が連携した ESD 事業が実践されている。この事業の推進員で学校、地域、企業のコーディネーターを中心に担って見える上野薫さんから成果と課題を報告していただいた。

〈報告者〉上野 薫さん(かすがい KIZUNA プロジェクトコーディネーター)

〈かすがい KIZUNA が目指していること〉

「かすがい KIZUNA」の事業目的は地域に既存する自然環境・人的資源を有機的に結びつけ、小学校区を最小単位とした「人と自然を尊ぶ心の育成」である。この事業を動かすしくみとして、持続可能な地域(民、学、産、官)連携型学校教育システムの確立を掲げている。(2006 年 10 月全国 75 件の応募採択された 10 件中の 1 件であり、2006 年度は計画フェーズ、2007 年度 5 月に再採択され実践フェーズに入り、2008 年 3 月までの 1 年半活動を実施した。)

具体的な事業としては、いのちを尊ぶ心を小学校総合学習の中で育成する KIZUNA ラーニング、地域社会のつながりからより広くいのちを尊ぶ心を育成する KIZUNA コミュニティ、地域で ESD 活動を展開する人材を育てる KIZUNA コーディネーター育成の三本の柱がある。

かすがい KIZUNA 推進室の運営体制は推進員 15 名と中部大学の学生で構成され、外部団体や組織との協力を得ている。推進員である地域団体のリーダーや専門職の個人は、専門分野の知識・技術を地域還元や(小学生・大学生にとっての指導者)、所属団体での ESD 活動を展開している。また大学教員は研究ベースの専門知識・技術の地域還元や学生を対象にした ESD 的教育・専門教育の実施を、大学は持続的な ESD 教育のシステム化を、大学生は地域コーディネーターを、企業は合理的な組織運営・業務管理・技術の地域還元を担っている。

この他にも推進員は、小学校教員が ESD への理解を促し自主的展開を促進すること、PTA を対象に ESD の理解を促し家庭における ESD 活動を展開すること、小学校児童を対象に広い視野で命の尊さを伝え理解や行動を促すこと、住民に対して ESD への理解と ESD を反映した行動を促す役割を担っている。

〈かすがい KIZUNA の事業内容〉

いのちを尊ぶ心を地域社会のつながりから育成する KIZUNA コミュニティの事業内容は、PTA 活動をうまく活用して実践している。今年度は PTA 懇談会後の時間を利用して、ESD および KIZUNA 事業の説明を行い、PTA 主催行事である年末恒例で「親子・友達の絆を確かめよう！ゲーム」やクラフトを実施し、「『絆の樹』植樹祭」を実施した。

総合学習の中でいのちを尊ぶ心を育成する KIZUNA ラーニングは、自然と人の関わりを理解し、社会の問題に関心を持ち、自主的に行動できる子ども(大人)を育てること目標とした。対象者は小学 4、5、6 年生である。初等教育の現場は本来子どもに与えるべき教育を地域の人材が補う状況にあり、今年度は春日井市東高森台小学校の総合学習の時間で実施した。

具体的授業内容は以下である。

- ・4年生のテーマは『季節の生き物観察』。学校ビオトープや春日井市少年自然の家で、身近な自然の生物観察や生物の命、環境と生物の関係、生物の種多様性、里山の現状観察などを実施した。
- ・5年生のテーマは『大谷山の健康診断』。校区の山林で、人工林の健康診断、人と森の相互関係、世界と日本の森、木材の輸入と人の生活について学んだ。これにより、グローバルな視野で自然界を大切に思う心の育成を促した。
- ・6年生のテーマは『福祉施設を見学しよう』。地域の福祉施設の協力を得て施設を訪問し、入所者の生活を見学し、地域に多様な人間が存在することを知り、自分との違いや生じた感情を見つめることで、人を思いやる心の育成を促した。

この3年間の学びはつながっていて、観察により身近な自然の命を見つめ、知ること、地域の環境保全の体験から里山の課題を知ること、地域に存在する人間の多様性を知ることから共生という価値観を得ることへと学びが広がり、深まっていくカリキュラムになっている。

実施の体制として、少人数の班単位でおこない、班に1名はTA(大学生のアシスタント)を配置している。講師は担当教員ではなく、学生・市民・大学教員が担い、学ぶ側に新鮮な気持ちを持たせ、地域に視点を向けるしかけとなっている。さらにインターネットを活用(e-ラーニング)したデジタル教材を作成し、主体的に学ぶツールを開発している。

〈KIZUNA コーディネーターの役割〉

地域でESD活動を担う人材を育む KIZUNA コーディネーターは大学生であり、大学教員・地域の専門家が、KIZUNA コーディネーターとしての必要な教育を実践している。大学生を本事業推進に全般的に関わらせ、人間力および社会に出てからESDを推進する中心人物となるための資質を向上させることをねらいとしている。具体的には、大学生が、小学生を対象にした教材づくりの工夫や授業の準備などをし、授業実施後にレポートを作成し、課題を把握しながら、次の授業に活かすという、実践教育を実施している。

事業評価は、関係者へのアンケートから把握している。事業を実施した小学校の教員を対象に行ったアンケートでは、学力の向上への期待は薄いという意見がある一方、社会性、社会経験の育成に期待する、学生の責任感や実行力は評価に値する、子どもの体験や連携を評価するという結果を得ている。

また、小学校で実施する際の課題としては、教員の教育目標の理解に差があることや、環境教育に偏りのある授業内容と捉えられてしまうことがあり、小学校の先生に対する説明不足から起きてくる問題と認識していて、今後の改善を要している。

〈かすがい KIZUNA が抱える課題〉

今後活動を拡大、深めるために以下の課題がある、

- * スタッフの増員、他 NPO 等との連携拡大である。地域に既存する自然環境・人的資源を有機的に結びつける事業をおこなうには現在のスタッフのみではマンパワーが不足している。他 NPO 等との連携拡大するためにもコーディネーターの存在が不可欠である。
- * 懇談会や行事に参加できない PTA も多く存在するため、あまねく知らせるためには、小学校 PTA 広報と連携することが効果的であるがやりきれない。
- * 現行授業・教材の改善。学びから課題を抽出し、課題解決につなげられるように改善する。

- *より自然度の低い(高い)小学校を想定した教材作成。自然に恵まれた東高森台小学校を題材に教材を作成しているが、春日井市の他の学区への展開を想定して教材を開発したい。
- *小学校教員による自主的活用。教員自らが必要性を見出し主体的に授業にアレンジできるよう促すこと。
- *研究室レベルから大学レベルへの教育の展開。上野研究室だけではなく、他の研修室、他学部など、大学全体での取り組みにしていくしくみをつくること。
- *予算の獲得。今年度で環境省からの事業費がなくなることもあり、自立して事業を実施するために助成金確保が必要となる。
- *教育委員会との共催。これまでは実績が伴わなかったので働きかけることが難しかったが、地域に必要な学びのしくみとして、教育委員会の理解を得て、情報共有や課題解決などへの大きな動きをつくりだしたい。

【意見・質問タイム】

質問：東高森台小学校で実施場所とした理由はなんですか？

→この事業の事務局である日立製作所がすでにこの地域の学校と協働事業を実施しており、学校の特色やニーズを把握していたなかで、東高森台小学校がふさわしいと判断したため。

アドバイス：学校の教員の協力を得るには、事業展開をすることで教員の負担が減ることが重要である。

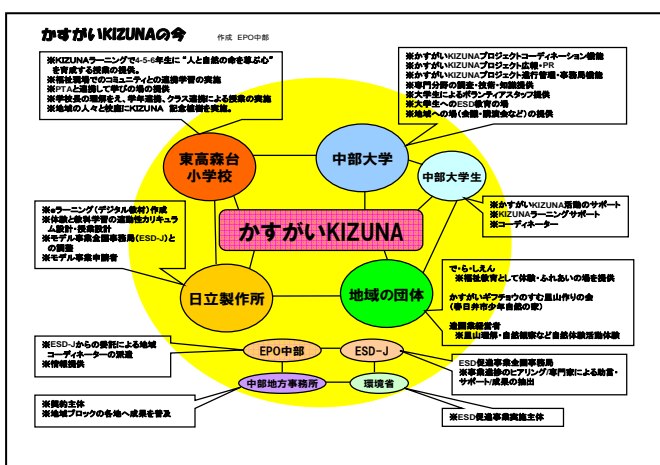


【6つの分科会「ESD 的地域の学びをつくる」 14:30~16:00】

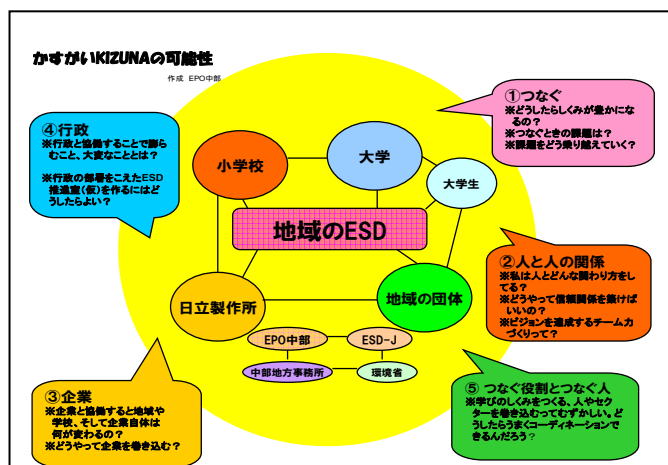
運営協力:ESD-T

かすがいKIZUNA プロジェクトの報告内容を素材に、この地域でどんな取り組みができるかを6つの切り口で話し合い、この地域の ESD 普及に向けた 2008~2010 年のアクションプランのタネを見つける時間を設けた。

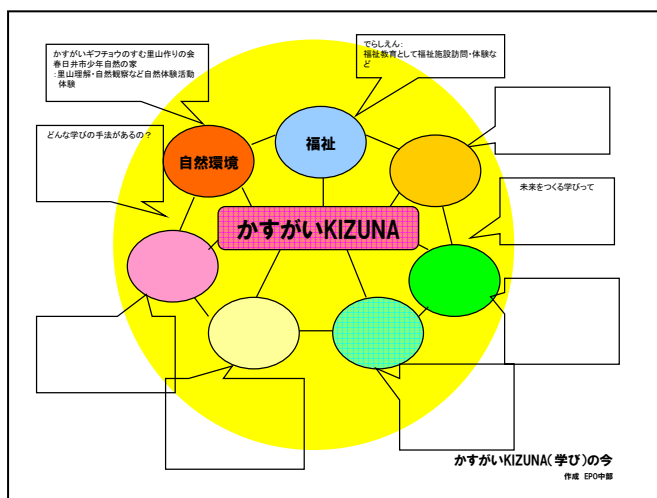
かすがい KIZUNA プロジェクトの現状



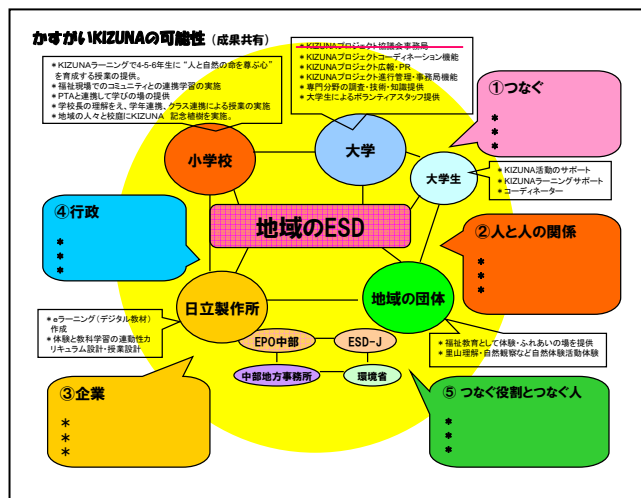
かすがい KIZUNA プロジェクトと分科会テーマ



かすがい KIZUNA プロジェクトの学びの内容



かすがい KIZUNA プロジェクトの可能性は？



【分科会内容】

■分科会1「つなぐ」

ねらい:ESDのキーワードは「つなぐ」。つながると何がどのように変化し、ESDの学びとなっていくのか、地域の様々なセクター、分野、立場の人がつくるESDにはどのような可能性があるのかをゲストの話題提供から模索する。

ゲスト:宮崎稔さん(学校と地域の融合教育研究会・秋津コミュニティ)

進行:牧宏さん

参加者:9名

〈プログラム概要・タイムスケジュール〉

- *自己紹介(15分)
- *ゲストからの提案(30分)
- *参加者の活動及びその中での「つなぐ」について(30分)
- *「つなぐ」にとって大切なこと、課題等(15分)

〈実施内容〉

- ・習志野市立秋津小学校についての学社融合までの経緯
地域との関わりの中で不登校がなくなった、地域の人々との連携、まちづくりへ
 - ・学社融合への道
学校と地域との本音のぶつけ合いの中から、次第に分かり合っていった。また、学校の職員間でも、学社融合の成果が挙がってくることにより理解が得られてきた。
 - ・つなぐについて;横のつながり、縦のつながり、時をつなぐ(つなぎ続ける)
 - ・融合とは;たてのつながりから横のつながりへ
組織的につなぐというより、有志としてのつながりから互いにメリットがないといけない
 - ・融合とは、「だめでもいいじゃないか!」「楽しもうよ、できる人ができる時に」(ゆるやかな連携)
 - ・学社融合のしくみ及びその維持・発展について
人が変わっても教材をつないでいくことが大切である(継続性)。また、ある時には計画の変更も必要である(柔軟性)。
 - ・時をつなぐ事例:戦争体験の語り。放課後に地域の人が〇〇を行う。おやじの会の活動。
 - ・コミュニティスクールからスクールコミュニティへ
 - ・子どもとのつながりでは、なぞることが大切である(共感・共有)。
 - ・徹底した情報の公開と本音のぶつけ合い。
 - ・つなぐ人がいなくなってきたことをハード面、ソフト面から考える。
ハード面:しくみ、組織をつくる。ソフト面:教材をつなぐ、計画の変更の必要性。
 - ・リーダーを取れる人がいるのかいないのか:無理のない形で、ムーブメントをおこす。
 - ・人材とは適切な表現か?:役に立つ人、役に立たない人と分けられるのか。
 - ・GNH(国民総幸福度)からの観点
- 〈成果:参加者および地域のESDへの影響〉

学校・地域・PTAのつながりについて、ヒントとなる話し合いになった。融合＝つながり合いは、様々な葛藤の中で定着していくものであること、更に、維持・発展するために工夫・努力がいることが分かった。この話し合いによって、学校－地域のつながりだけでなく、個人－団体、団体－団体とのつながり等に、発展・応用することができると思う。

〈今後の展望・課題・改善すべき点〉

それぞれの立場で、ESD的活動を進めていくとき、今どの段階にいるのかを考えながら、「つなぐ」を考える必要があり、それぞれの段階を考えて、活動を進める必要がある。

本音をぶつけ合うことができるか、更にゆるやかな連携から始め、そして、組織的な活動として、時をつなぐことができるか等、それぞれの段階で課題は多い。一つ一つ課題を乗り越え、ESD的なつながりへと進化していくと確信する。

〈担当者の所感〉

ゲストの学社融合＝「つなぐ」の事例から学ぶことが多くあり、多くのヒント、方法等参考とすべき点が多かった。特に、かすがいKIZUNAの関係者にとっても、今課題に直面しているところであり、分科会の話し合いによって、今後の方向性が明確になったと思う。参加者にとっても、今課題となっていることを解決していくためのヒントを得ることができた。



■分科会2 「ESD でつながる人十人十人十人の関係づくり」

ねらい:ESDには多様な立場の人が、多様な関わり方をする事で豊かな学びがつけられる。そのためにも、ミッションを達成し自己実現を図るには、お互いに信頼しあえる関係づくり、合意形成が基盤となる。その中で自分の心の中にある本人の気づかない“思い込み”や“心の壁”が対人関係や外部への関わりを複雑にしまうことがある。自分のコミュニケーションスタイルやそのコミュニケーションが他の人にどのような影響を与えるかに気づき、人と人の関係づくりを学ぶ。

ゲスト:杉山郁子さん(講師:日本体験学習研究会・グループファシリテーターの会Seed)

進行:近藤昌宏さん

参加者:9名

〈プログラム概要・タイムスケジュール〉

- * 導入 (5分)
- * 説明/班分け (15分)
- * コンセンサス体験実習 (55分)
- * 体験実習のもつ意味の説明 (10分)

〈実施内容〉

- * オリエンテーションの後、「5人のツアーガイド」を題材に、班分けし少人数で体験実習に取り組んだ。
- * 実習してみたの“ふりかえり”として、この取り組みの間で感じた自分の心の動きとともに、周囲からその人を見ての指摘をしあった。
- * その自己評価と他者指摘がもつ意味を”ジョハリの窓”によって講師より説明。体験>指摘>分析>仮説>体験の“循環過程”の連続の先に自己実現が行えることをあきらかにした。

〈成果:参加者および地域のESDへの影響〉

今回、初めての取り組みであったが、実際にESDにかかわる人の中での有効な交流のためにも「心」に関する学びが必要である事が理解された。

〈今後の展望・課題・改善すべき点〉

実習時間が短く、特にその後の体験実習の結果を個人の内面とつなぎ、本人の心について”思い込み”などの具体的な気づきにまで持っていけなかった。さらにその結果を現実のESDの取り組みの中の課題解決の参考にするまで至らなかった。

〈担当者の所感〉

今回、ESDにかかわる人の中でも「心」に関する学びが必要である事が理解されたと思われる。環境を改善する方法論も大切だが、それをつかさどるのはあくまで人間同士の心の交流の先にあることの実感を持ってもらえるような実習などを企画したい。

■分科会3 「ESDと企業」

ねらい：単なる環境問題を教える環境教育だけでなく未来世代に安心して暮せる環境を届けたい。そんな人づくりの学びを実現するために企業とどんなことができるか。企業をどう巻き込んでいくかを見出す。

ゲスト：門井徳孝さん(株式会社デンソー 総務部企画2室 DECO ポン事務局)

進行：浅田益章さん

参加者：8名

〈プログラム概要・タイムスケジュール〉

- * 参加者自己紹介 (25分)
- * ゲストのお話 (30分)
- * 参加者セッション (30分)



〈実施内容〉

- * 自己紹介：「環境教育と企業」の視点からそれぞれの想いを述べた。大学の学生、環境教育企画出版の企業の方、企業で地域社外の子供向け環境教育プログラム開発担当者、公務員、企業で環境、社会貢献担当部署の方。
- * ゲストのお話：「デンソーの環境共生～持続可能な社会づくりを目指して」
「デンソーエコポイント制度(通称:DECO ポン)」
- * 参加者セッション：かすがいKIZNAの実情を上野さんにお聞きしながら意見を出し合った。

〈成果：参加者および地域のESDへの影響〉

持続可能な自然環境教育プログラム、運営組織の整備

- * 児童の学年に合わせた年度繰り返しのプログラムの継続と改良の積み重ね
- * 環境教育の主人公は児童。脇役の親御さんへの協力依頼、地域の企業などへの協力要請
- * デンソーの環境教育助成基金制度への応募など積極的な企業へのアプローチ提案
- * 企業も地域への社会貢献に積極的な時代。寄付金だけでなく汗を流す協同の場作りを求めている

〈担当者の所感〉

- * 企業は地域の環境教育など社外のことについて知る機会が少ない。
- * 地域の環境教育の活動体も企業とどんなことができるか知らない。
- * 積極的な対話や協働の情報が発信、交流される拠点と繋ぐコーディネータがいる。

■分科会4 「ESDと行政」

ねらい：作っていききたい学びを実現するために、「行政に協力してもらえばもっと膨らむ」「法制度、政策、行政の事業などの仕組みがこうあれば、もっとこんな風に膨らむ」ことがある。私たちが作っていききたい学びを実現するために、行政と一緒に行動することでどんな風に膨らんでいくか、またそのために、どのように行政を巻き込んでいけるかについて話し合う。行政と一緒に行動するため、ESDを行政と一緒に推進する仕組みのあり方について模索する。

ゲスト：市嶋彰さん(環境共育ネットワーク「ワンダー・スクエア」・NPO 法人「まちづくり学校」)

進行：天野学さん

参加者：6名

〈プログラム概要・タイムスケジュール〉

- * 導入 (5分)
- * ゲスト自己紹介・参加者自己紹介 (10分)
- * ゲストのお話と問題提起 (20分)
「行政と行うことで膨むこと、大変なこと」
- * 意見交換 (10分)



テーマ：行政の縦割りをこえて ESD 推進する仕組み(ESD 推進室)

ESD を行政と一緒に推進する仕組み(行政と行うことで膨らむことがある)

〈実施内容〉

- * NPO 法人「ネットワーク福島潟」と行政の「ビュー福島潟」との協働の課題について問題提起した。
 - ・活動方針の共有があいまいであるため、認識に食い違いが生ずることが多い。
 - ・立場的に凝視 NPO 法人の優位は否めず、協働というより下請け的な関係に陥りがち。
 - ・行政と NPO が一般市民から評価も含めて同一視されてしまう。
 - ・お互いの事業領域に不明確なところが生じると、自主事業の取り組みに弊害がでる。
- * 問題提起をベースにグループディスカッションをおこなった。
- * 模造紙を使って役割や機能などの関係性を図式化した。

〈成果：参加者および地域のESDへの影響〉

- * 成果となる協働のポイント。
 - ・思いの共有：思いを一緒にすることからしか始まらない
 - ・双方の自立：対立構造からの脱却(行政は指導・隠蔽。市民は依存・要求の体質)
 - ・役割の明確化：できることよりできないことをお互いにオープンにすることが自立
 - ・立場への配慮：相手を慮るという精神こそ関係性を結ぶことができる。
- * 地域のESDへの影響

日本型の合意形成のプロセスを理解した上で市民活動による合意形成の理解が加わることの価値を発見した。多様な価値観の存在を認めながら、人々の立場の根底に潜む価値を掘り起こし、その情報を共有してお互い納得できる解決法を創造していくプロセスの大切さが認識された。

〈今後の展望・課題・改善すべき点〉

行政が関わる法制度、政策、予算などの仕組み、枠組みの理解をべ得るための資料などが必要。行政が入ると何がかわるかの可能性についてメリットを出すことができなかった。かすがい KIZUNA が抱えている教育委員会行政が部署を越えると何がかわるかの可能性についてや、ESD を行政と一緒に推進する仕組みについて、今後議論をしていきたい。

〈担当者の所感〉

行政との協働を考えると、NPO/NGO の立場から言うと、行政に対しては対峙した立場に立って物事を見ているように思う。しかし、今回の分科会を受けたことで、そのような見方や考え方が違っているように感じられた。それが、自立した対等な関係づくりを双方努力する必要がある。また、相手を慮り、相手が必要としていること、自分達が必要としていることを明らかにして補完しあえるような関係づくりが必要と考えられるようになった。

■分科会5 「つなぐ役割・つなぐ人」

ねらい：テーマを「つなぐ役割・つなぐ人」とし、ESDの推進に求められる連携や協働のためのつなぎ役について意見交換を行うことを目的とした。議論を通して、コーディネーションの成功例や失敗例から、人と人、あるいは活動と活動をつなぐ自分なりの手法を考える。

ゲスト：浜本裕子さん(ESD 関西)

進行：古澤礼太さん

参加者：4名

〈プログラム概要・タイムスケジュール〉

- * 分科会の説明 (5分)
- * 自己紹介 (15分)
- * ゲストトーク (20分)
- * ディスカッション (30分)
- * まとめ (10分)



〈実施内容〉

* 自己紹介

* ゲストトーク：浜本裕子さんから、“ESDとよなか”の活動紹介やご自身のコーディネーターとしての体験談などをお話いただいた。住宅地における地元民と転勤族の交流をめざした活動など、興味深い活動を紹介があった。また、人と人をつなぐ時に心がけていること、例えばつなぎたい相手の両者がそれぞれに得るメリットを仲介者が的確に把握するなど、具体的なアドバイスもいただいた。

* ディスカッション：その後の議論ではまず、なぜつなぐことが求められるのか、という問題から意見を出し合った。世代・業種・出身・地域・団体・分野・民族などの違いにより、多くの分断があるからこそ、つながって問題意識を共有することが地域発展に不可欠であることを確認した。その後、ファシリテーションの成功例や失敗例などを出し合い、今後の活動で気をつける点などを話し合った。

〈成果：参加者および地域のESDへの影響〉

グループ全員がほぼ初対面という中で、楽しく和やかに会が進んだ。参加者の意見にもあったが、多様なつながりを求めるために“アンテナを高く持つ”といったことや“地域の資源探しを行う”という言葉に象徴されるように、今後のESD的な地域づくりには、高い好奇心と多様な関心を持つことが重要であることが論じられた。具体的に今後の連携などは議論できていないが、高いアンテナを持った参加者同士は今後さまざまな場面で出会い、つながっていくと思われた。

〈担当者の所感〉

つなぐことに関心を持っている人が多かったということが要因だったのか、参加者はみな非常にコミュニケーション能力の高い方々であった。ゲストの浜本さんも気さくで自然体のまま参加者と意見交換がなされたので、意見が次々に出てきた。それぞれの思いをもって活動続ける市民を「つなぐ」という行為は時として押し付けがましいこともあるように思うが、「つながりを発見できる場づくり」は、今後のESD推進にとって欠かすことのできない重要な活動のひとつとなることを再確認した。

■分科会6 「未来をつくる学び」

ねらい:「いのちを大事に、より豊かにふくらむ ESD の学びとは」をテーマに、参加者にとっての「いのちを大事に感じるとき」「未来に必要なだと考える学び」を出し合い、いのちを大事に思う未来をつくらうと思える学びの内容、あり方を見出す。

ゲスト:伊藤伸介さん(農山漁村文化協会 文化部)

進行:遠山涼子さん

参加者:5名

〈プログラム概要・タイムスケジュール〉

* ゲスト・参加者自己紹介 (20 分)

自己紹介テーマ

「いのちを大事に感じるとき」「未来に必要なだと考える学び」

* ゲストのお話 「学びの多様性と可能性～地域の実践事情から」 (40 分)

* 参加者セッション「今必要な学びとは」「今必要な学びを学ぶ場のつくりかた」 (25 分)



〈実施内容〉

* アイスブレイク:参加者意見抜粋

☆いのちを大事に感じるとき:食するとき。笑顔。死(生物、人)を見たとき。人と人の心。災害時。小さなものに気づいたとき。

☆未来に必要なだと考える学び:すべての生物、自分以外のことを考えること。思いやり。楽しみ。心の教育。受容。まちづくり。人と人のかかわり方。相手の喜びが自分の喜びに。

* ゲストのお話のポイント

食農教育・食すること＝山、川などの自然を守ること。昔の知恵を引き継ぐことのおもしろさを伝えたい。

農作物(「のうさくもつ」×「のうさくぶつ」)暮らしの中の農業、その中に教育につながる力がある。

食と農は地域を学ぶ窓

学びのポイントとして、まず楽しむこと。知恵を引き継ぐこと。そして地域を活かすこと。

☆事例紹介①山形県東置賜郡高畠町立二井宿小学校

⇒6年間で12品目の農作物が栽培し30種類の料理ができることが教育目標。

☆事例紹介②「羽釜で飯炊きに挑戦！」(食農教育 2005. 1 より)

⇒お米がごはんになる不思議について、我孫子第二小学校での活動を紹介

☆孫にもたせたい4つの確信(食農教育 2005. 1 より)

1)この村に生まれてよかった、2)農家の人、昔のひとはえらい、3)自然はすごい、4)おれもやればできる

* 「今必要な学び」「自分にできること」意見交換

* かすがいKIZUNAへの提案

〈今後の展望・課題・改善すべき点〉

☆展開している・できる活動

・駅前の清掃活動(個人ではじめて取り組みが今では 200 人規模。行政、企業ともつながってより広げたい)

・かすがいKIZUNAへの提案(数値目標をたてる。成果の評価をする。目標を視覚化して共有する。)

☆3つのキーワード

①土地の特性に合う取り組み、②しくみをつくる、③広がりを持たせること。

〈担当者の所感〉

参加者の活動背景に差があり、現場のイメージが共有できないまま進んでしまった。伊藤さんからの話を共通認識にして、セッションを展開できるとよかったが、導くことができなかった。かすがいKIZUNAに対しての提案も活発に出されたので、各自の地域に持ち帰って今後活かしてもらえるような場を今後も提供していくことが必要と感じた。

【全体会:16:00~17:00】

全体会では、それぞれの分科会のゲストから話し合いの中で見出したESDを促進する上で重要な手がかりとなる3つのキーワードを紹介、説明していただき、会場から質問やコメントの時間を設けた。

■第1分科会「つなぐ」

- 1) かるやかに: 学校の教員に負担をかけない姿勢をもつこと。
- 2) 時をつなぐ: 例えば、たんぼでお米を作る体験学習をしたら、できたお米を全部食わずに、残して来年の5年生にプレゼントするというように、引き渡していくこと。
- 3) 理念をつなぐ: キーパーソンが抜けても、理念に沿った活動ができるようなしくみをつくっておくこと。

質問: どうしたらかるやかにやれるのでしょうか。

答え: できる人が、できる時に、無理なく、たのしく、義務でなくやること。

質問: 学校の先生というのはあまり地域の人を学校に入れたがらないのでは。

答え: 授業に来ることさえ拒絶する学校もある。地域の人には授業をしにきたのだから・・・といったような見返りを期待することは避けてください。

〈ゲストからのコメント〉

こどもを褒めなくては、と思うとしんどくなる。子どもは褒めるのではなく、なぞってください。例えば、子どもが砂場で山をつくっているとします。そしたら「大きな砂山だね。」と事実をなぞる、事実を共有するということが大切。子どもは、自分のやっていることは無視されていない、という安心感を持ち、その大人が好きになり、その大人は先生からも信頼されるようになる。

■第2分科会「人と人の関係」

- 1) 継続可能: 体験学習は、学びを次につなげるという意味で継続可能な学び方である。
- 2) 人と人とのふりかえり: 人と人が向き合って、体験のふりかえりを行うこと。
- 3) 多様な人との関わり 体験学習循環過程を行うことで、日常から自分の対人関係の傾向とか、人との関わりの中で何ができるかとか、どんな風に自分をしていきたいかを学んでいくことができる。

※理論として、体験学習の循環過程について、「ジョハリの窓」という対人関係の図解式モデルについて説明した。

〈分科会参加者の感想〉

学校現場でこの手法を多様な人と関わるしくみとして再構築すれば実現可能なので、とりいれたい。自分ひとりだけでのふりかえりではなくて、人と人との関係のなかでふりかえることの重要性を知った。

■第3分科会「ESDと企業」

- 1) 親を登場人物に(社員も親)

社員は親である人がほとんどなので、親を前にだせば自然と企業に関わってくる。一番小さい教育現場は家庭であり、家庭の中での教育をなんとかするにはやはり「親」がポイント。

- 2) 企業にとっての嬉しさ

企業の人づくりは、職場力や品質保持、チームワークなどに関連している。人づくりにESDが役に立つのですよ、ということを手前に企業に対して伝えれば、企業もそこに社員を参加させることが自分の会社にとって大事なことで、応援しようということになり、親である社員がESDに参加して社員が変わった、社員が喜んでいることが伝

われは、そこから企業は離れない。企業にとってのうれしさと、親であるという部分を上手につないでいくことが大切なポイント。

3) 子どもにとっての嬉しさ(企業のノウハウの活用)

デンソーではデコポイント制度というしくみをつくり、社員の自発性を引き出して、それを地域の活性化につなげている。また社員、親、企業の得意とする PDCA など活用することで子どもにとって大切な ESD をスパイラルアップで持続していく力になる。

■第4分科会「ESD と行政」

1) 行政・市民それぞれの自立

問題をはさんでお互いに要求しあう、責めあう関係ではなく、自分たちの弱さを認識して認めて、助けを求めていくこと。

2) 「素直に助けてという」

市民は市民として、行政は行政としての考え方をもちながら、お互い力の及ばないところを認識して、自分たちの立場を主張するのではなく、相手の立場を配慮しながら、相談したり提案したりするというスタイル。

3) 相手の立場を慮る

大切なことは、共感したり、共有したり、共通認識をもつということからスタートする。

■第5分科会「つなぐ役割とつなぐ人」

1) なぜつながることが大切か

世代間、業種間、セクター間、出身地、空間的なものの縄張り、団体間、分野間、外国人を含む民族などで分断があるのはもったいない。

2) アンテナを高く張る

自分自身が媒介になってつなげるということが大切。

一人ひとりがつなぐ媒介になる。

3) つなげるための心がけ

二者間相互のメリットを考えて上手に提示していく。フェイス to フェイスの関係

〈ゲストコメント〉

一番大事なのはコーディネートしたいという気持ち。自分だったらどうするか。自分だけで解決しようとしなくていいことが大切だ。

■第6分科会「未来をつくる学び」

1) 地域に根ざした学び

地域はリアルな学びの場。地権者の話や村の役割、利害関係などリアルな場として地域を学ぶことで、自分たちの地域が自分そのものになっていくようなことが大事。

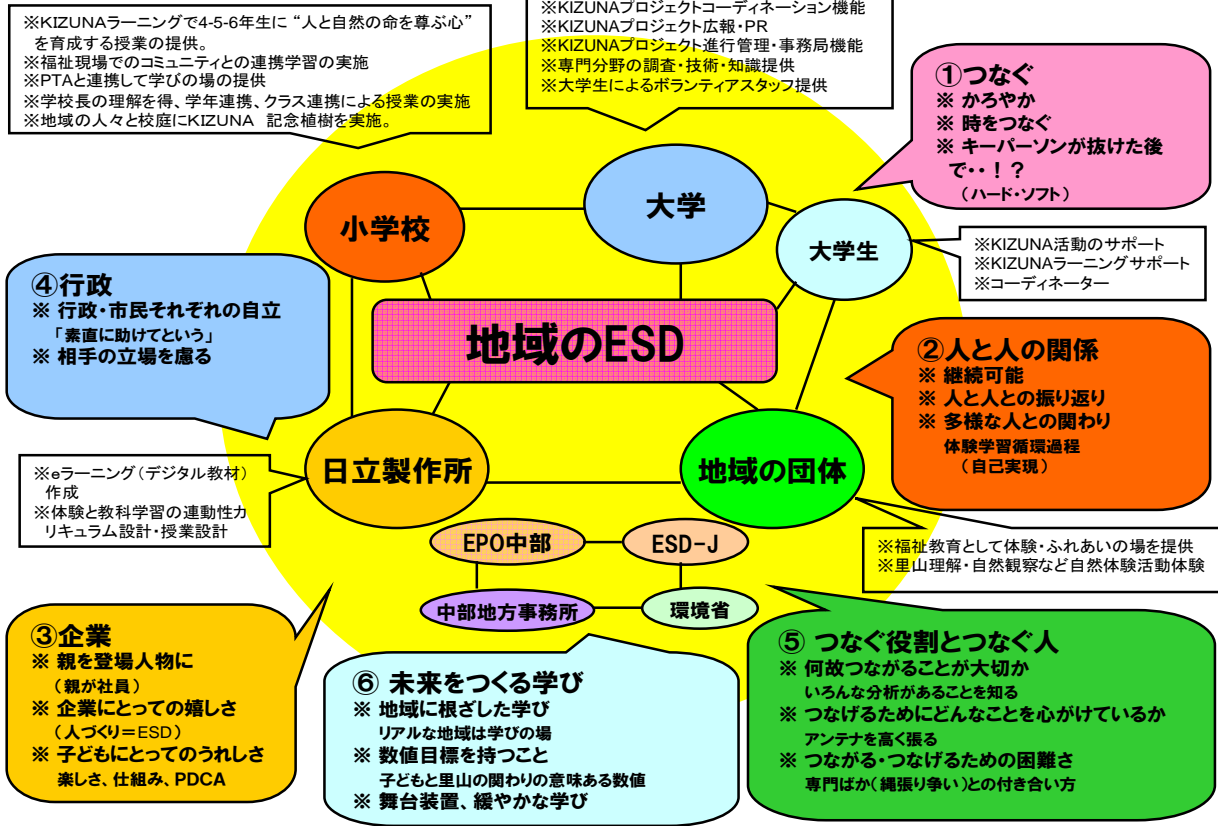
2) 数値目標を持つこと

子どもと里山の関わりについて意味ある数値をさがし、共有することで、みんなで目標に向かっていける。

3) 舞台装置、緩やかな学び

継続するには、中心人物がいるだけでなくプログラムと組み合わせさせて楽しんで学べるのが大切。田んぼのようなみんながゆるやかに関わることができるような舞台があるとよい。

かすがい KIZUNAの可能性 (成果共有)



■かすがい KIZUNA プロジェクトからのコメント

今日は成果報告の機会をいただき、自分たちの事業を客観的にみることができ、多くの方と意見を交換したり、貴重な意見をもらうことができとても有意義な機会となった。感謝の気持ちでお礼をのべたい。今後もこの地域と一緒に頑張っていきたいと思う。

所感

かすがい KIZUNA プロジェクトの実践報告を機にこの地域の ESD 活動者の集いを持つことができた。内容的にはプロジェクトの報告および今後の活動に生かす研究会としての位置づけであった。当日は大雪で悪天候であったが、参加予定者はほぼ集まり、熱心に報告に耳を傾け、分科会で本音の議論を交わすことができた。

ESD は実践者、実践場所、分野などあらゆる意味で多様であるが、かすがい KIZUNA の事例は、環境教育という入り口の入りやすさや、どの地域にも存在する学校が舞台であること、ゼロから組織を立ち上げていることなど、非常にベーシックなモデルであり、このプロジェクトのプロセスから気づかされる点、地域で ESD のしくみづくりを手がけるときのヒントを得ることができた。

参加者は自分の活動と照らし合わせ、考えながら、一緒に可能性を探っていた。本音をぶつけあうことができる関係を築くことができているか、地域のステークホルダーとのつながりはどうやって生むのか、つなぐ役割の人材はどうするかなど、ゆるやかな連帯から組織的な活動としてつないでいくときの課題が浮き彫りとなった。この活動が継続してさらに地域としての連帯を生み、ESD の大きなムーブメントをおこしていくように、今後もしかけ、働きかけていく。



ESD フォーラム かすがい KIZUNA プロジェクトお披露目フォーラム

参加者アンケート結果（回答者：22名）

■この地域の ESD の活動や動きについてどう思われましたか。（オリエンテーションを通して）

ESD について知ったこと、考えたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境教育との違いが（少し）わかった。 ・ まったく知らなかったので、連携するカタチにびっくりしました。特に日立さんががっつり入っていること。 ・ 提案の時点から今までの動きが少しわかってよかったです。ESD はこれだ！というものではなく、中心におこなっている方も ESD の可能性を感じながら模索していることがわかって、かたくなっていいなと思いました。 ・ 抽象的ですが…、今の社会の色んなひずみを直していくための出発点が ESD の中にあるのではないかと感じました。
この地域の ESD の活動について感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高い志が感じられて良い。刺激を得た。 ・ 本日が本当のキックオフと感じました。 ・ 地域でこんなにも ESD の活動が進んでいることを始めて知りました。 ・ とてもたくさんの方の活動がなされていることを知れました。 ・ 実際に活動している人、関わっている人のつながり、熱さに感動しました。 ・ EPO 中部を中心として、横のつながりが盛んで頼もしいです。 ・ みなさんいろいろな活動をされているなと思いました。 ・ 活気がある。事務的役割の体制がしっかりしている。 ・ 幅広い視点で、多様な人たちが関わっていることに感激しました。（環境省や中間支援組織の力は大きいでしょうけど）
ESD の普及について	<ul style="list-style-type: none"> ・ もっともっとながって広がってほしいと思います。 ・ 精神的に活動が行われていると思います。これからの活動についても、外部に向けて発信して頂きたいです。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ まだ発展途上だと感じました。必要性を強く感じられませんでした。そこが課題でしょうか。 ・ ESD の様々な動きについてはよくわかったが、今回のフォーラムがその中でどの様な位置付けで行われたのが明確でなく、EPO 中部（環境省）の働きが参加者に伝わったかどうか疑問である。この会がどのような位置付けかが参加者にわかるように進行したほうがよい。勿論東海地域でのほかの ESD の動きを知らせることも大切だが、やや全体的網羅的な説明であった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 場所についてあえて選ばれた点について感謝をしました。 ・ 先進リーダーの団体の存在が重要であると感じました。 ・ 自分なりに持続的な活動を続けていきたいと思っています。（ゴミの分別や節電・節水など身近なことから）

■かすがい KIZUNA の報告を聞かれてどう思われましたか？かすがい KIZUNA へのメッセージをお願いします。

応援メ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学が抜けても継続させる仕組みを作ることは大変だと思うが人づくりをがんばって
-----	--

<p>メッセージ</p>	<p>下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 皆さん一所懸命やっておられる感じですが、「無理がありませんか」「継続への強い思いに障害はありませんか」 ・ 今後の活動に注目しています。種まきをする！ことが大事というポリシーを持ちつつ。 ・ 小学校の子ども達を通して、実践的な活動をされていることに好感を覚えました。ぜひ続けていける活動になってもらいたいです。 ・ 素晴らしい実践だと思いました。 ・ これからも続けて活動して行って下さい。たくさんの経験を積んでこられた方々から意見やアドバイスをいただくことはとても大切だなと感じました。 ・ 正解はない活動なので、大変だと思いますが頑張ってください！応援しています。
<p>期待</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の企業とのコラボに期待。 ・ まだまだ問題点は多くあると思いますが、取り組みとしては非常に興味があり、期待しております。 ・ 20年度以降どう続けていくのか今後に注視したいと思います。
<p>参考になった</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 計画的、組織的な事例であり、今の私達の進め方の参考になった。 ・ 環境教育だけではなく、それを通して子どもの育成を推進している事を知り、ESDについて勉強できました。 ・ 従来の総合学習にESDの視点を入れる考え方の組み立て方を学ばせてもらいました。
<p>アドバイス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年も自立的に継続していただけることを期待した。他の地域へ波及していくことが必要。 ・ 学校教育に関する方々が多いと思われそうですが、環境に対する考え方を今後とも深める必要があると思います。 ・ 「ラーニング」の中にも親を主体的に登場させると色んな広がりが見られると思います。特に企業を巻き込むためにも「働くお父さんお母さん」＝「社員」をどう巻き込むかが重要⇒会社にとっても「社員の成長」といううれしさにつながるはず ・ 方向性はすばらしい。あとは細部の方法論。(ズルさも身につけたらよいのではないかと構造化。環境「教育」と国語や社会の「教育」とは何が違うのかを勉強するとよい。 ・ いろいろな団体等が関わり、ESDを進めていることは、説明や関係図では理解できたが、例として出された小学校と中部大学との連携の学習については、特に目新しさは無く、ごく普通に行われては、出前授業とかわからないと思った。カリキュラムについても、3学年(4, 5, 6年)が提示されたが、1つの核となる教材等が1～6年へとつながったり、学泉1年1回の授業参加で本当のつながりかどうかは疑問である。学校連携・融合という点からという、学年の系統としての縦軸、1年の中でのつながり(例えば季節ごとの実践等)としての横軸からつながりを考える必要があるし、先生との共同作業はあったのか、また他の分野の授業についての連携はされたのか等、多くの課題が感じられる。しかし、2年間の中で、そのとりかかりを作れたことに敬意を払う。今後、授業カリキュラムに関して言えば、大学、企業、地域団体等の参加・連携している活動について、1つかどうかはわかりませんが、KIZUNAとしての具体的なカリキュラム(1～6年)から作成され、どんな内容が実施されているのかという計画が明示されることを期待する。(その中で環境・福祉・国際等の視点示されるとESDがわかりやすい)
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ やはり1年間だけということもあって、4年～6年生で一貫して3年間の授業を受けての成果が知りたいと思いました。 ・ 私の生活を続けていたら、わからなかった世界のお話なので、とてもお世話になりました。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ えてして人が変わると次も変わると言われますが、地域の受け皿をどうするか私の課題でもあります。 ・ 細かな項目における貴重な意見ありがとうございます。
--	---

■参加した分科会で得たものがありましたか。

分科会でゲストや他の参加者に出会って、新しい気づきや学びがありましたか。

分科会 1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宮崎先生の学校での活動の内容や、子どもをほめるのに、子どもの活動をなぞるという言葉は大変参考になりました。 ・ まさに「きずな」でひとつの歩みを無理なく他につなぎ、次第に大きな穂となるムーブメントにすることが大事であると感じました。 ・ 宮崎先生のお話を聞くことができ本当に勉強になりました。かるやかにつながることが日本中に広がるとすばらしいと思います！
分科会 2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人と人の関係、積極的に関わっていきたいと思いました。杉山先生の指令とやり方について非常に感動をしました。イメージとことなった点は良くメンバーの意見を聞いてくださいました。 ・ 体験学習を通して、自分の成長の仕方、人とのコミュニケーションのとり方を学びました。 ・ みなさんのやりたいことの思いは結構近いところにあるんだということ。
分科会 3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就職活動における CSR の大切さ ・ 企業が何を求めているかという認識にまだまだギャップがありそう。「社員という立場を忘れてくれる社員」をキーマンとして見つけることが企業を巻き込む近道かなあ？
分科会 4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行政との協働について勉強になった。 ・ 行政と地域住民との関わり方について強みではなく、弱みから作る協働関係 ・ 行政の方が正直に自分の立場や考え方についてご意見を述べている姿に、明るい未来を感じた。
分科会 5	<ul style="list-style-type: none"> ・ コーディネーターのポイントを得た。名古屋の状況を知れた。 ・ つながりをひろめるヒントをもらいました。あまり真剣に考えすぎずにコツコツと動きます。 ・ 人と人とのコミュニケーション。
分科会 6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 農業と教育の関わり。→可能性
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7人の分科会で貴重な話をいろいろ聞いた。 ・ 普段聞いたことがないESDという言葉がとても新鮮でした。 ・ ありました。お土産に持ち帰ります。

★ESDをご存知でしたか。 (Yes : 20名 ・ No : 2名)

★ESDへの興味が深まりましたか。 (Yes : 22名 ・ No : 0名)

★ESDにどんな関心がありますか。

人のつながり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境教育と人づくり。 ・ 人と人とのつながりが大切だなあと感じました。 ・ 人をつなぐこと
ESDの意味・意義	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境の広い範囲について、具体的自分自身をどう関わらすか、今後の課題にしていきたい。 ・ 環境ではないという意味がよく理解できました

	<ul style="list-style-type: none"> その成果がどんな効果につながるのか。
教育内容	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育との関わりの可能性 ESD の教材開発、及びカリキュラム作り・実践
企業	<ul style="list-style-type: none"> 企業に「地域の ESD に関わっていききたい。応援したい」と思わせるにはどうしたら良いのか。

★ご自身は ESD とどのように関わりがありますか。またはどのように関わろうと思いませんか。

個人	<ul style="list-style-type: none"> 多くの参加をして今後とも自分の糧にしたいと思います。 できるところからやっていきたいです。 自分の活動の幅を広げる助けにしたいです。 地域の中で持続的な活動をしたいと思いました。
企業	<ul style="list-style-type: none"> 何も知らない頃から企業で ESD を取り入れられないかを考えています。道のりは遠いですが少しずつ形にしていきたいです。 社員が自発的に ESD 的な活動に参加していくような仕掛けをしたい
団体の活動	<ul style="list-style-type: none"> 名前は別として、やっていることは ESD だと思う。今後は体系的な活動をしたい。 自分の NGO 活動を推進することが ESD そのものであると信じました。
行政	<ul style="list-style-type: none"> 行政として関わっていききたい。 行政として関わっている。
学校	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育の中で関わりを持つ。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 現在は団体加盟している。地域の資源を活かした ESD の推進。 研究者として。 「KIZUNA」で関わってます。 いろいろあります ESD-J、ESD-H、ESD-N（仕掛け中。もっとまじめにやらなくては） キックオフミーティングから ESD-T への参加を行っている。ESD-T の行う行動、活動への参加を行っている。

●このフォーラムに参加して、ESD を推進するために参考になりましたか。

(Yes : 18名・No : 0名・無回答 : 4名)

その理由をお聞かせ下さい。

事例を多様な切り口で考えた	<ul style="list-style-type: none"> 事例発表により、具体的なイメージがつかえました。 細かく項目に分けて話す機会があまりないので、とても貴重な場となりました。 現場の苦悩を知れたこと 実践を丁寧に考え合っている。真摯なフォーラムでした。 多様な切り口での分科会の持ち方 多面的な ESD への理解が深まった。
出会い	<ul style="list-style-type: none"> 様々の出会いがあったから いろいろな方と出会えて、今後の私自身のためになりました。 いろんな刺激を受けました
その他	<ul style="list-style-type: none"> ESD の理解を深めること。自分の活動との整合性に合致。 かすがいプロジェクト 可能性・広がりを感じる。

■その他、ご意見・ご感想・改善点等をお書き下さい。

- ・ ありがとうございます。
- ・ 本日はどうもありがとうございました。
- ・ 大変な日でしたが多くの参加者よかったですね。名古屋の会場も多く集まるとよいですね。
- ・ 有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- ・ ん～～、色々なやましい・・・・・・・・
- ・ がんばって下さい
- ・ 会場のすばらしさを活かしきれていないような・・・
- ・ 「かすがい KIZUNA」の発表がメインだが、分科会運営の観点からすると、分科会の時間が少なすぎた。あれだけ多彩なゲストを招いて、2時間に満たない時間では勿体なかった。13:00開始するならば、オリエンテーション15分（～13:15）、KIZUNA の発表・質疑を含めて30分程度（～14:00）、分科会（16:30）、全体共有（～17:00）くらいの時間配分が良いと思われる。オリエンテーション、KIZUNA 発表、全体共有が間延びした感じで分科会が窮屈な感じがした。会運営の仕方に軽重をつける必要がある。

収 支 決 算 書

区 分	金 額(円)	算 出 内 訳
収 入	200,000	環境省 中部地方環境事務所 業務委託料
計	200,000	
支 出	33,000	人件費 VN スタッフ人件費
事業費	91,700	ゲスト交通費 ゲスト旅費交通費・スタッフ事前下見交通費等
ゲスト謝金	60,000	ゲスト謝金(10,000円×4人 20,000円×1人)
通信費	140	ちらし郵送料
会場費	10,000	
消耗品費	3,800	資料印刷費
雑費	1,360	振り込み手数料他
計	200,000	
備 考		

